Since 1972.2.24

帯広西ロータリークラブ 会報

第2126回例会

2016.2.18

世界へのプレゼントになろう

ROTARY CLUB OBIHIRO WEST JAPAN HOKKAIDO

■RI第2500地区テーマ■

もっとロータリーを楽しみましょう

■クラブ・テーマ■

大切な人にまごころを贈ろう

帯広５ロータリークラブ・芽室ロータリークラブ・音更ロータリークラブ 合同例会

帯広RC	第3473回例会	帯広北RC	第2801回例会	帯広西RC	第2126回例会
帯広東RC	第1507回例会	帯広南RC	第1131回例会	芽室RC	第2651回例会
		音更RC	第1059回例会		

総合司会　帯広西RC　飯田正行 SAA

会長報告　帯広西RC　大友広明 会長

皆さんこんにちは。多くのロータリアンの皆様が、合同例会にお集まり頂きまして、誠に有難う御座います。

今日、講師でお呼び致しました佐藤和孝さんですが、今月2月のテーマ、平和と紛争予防／紛争解決月間というなかで、増井国際奉仕委員長が直接メールを送り帯広出身のジャーナリストの佐藤さんに是非お話をして頂きたいと、ご連絡申し上げまして今日、ここにお迎えする事が出来ました。

佐藤さんは1980年にアフガニスタン紛争、2001年のアメリカ同時多発テロ、2003年には、イラク戦争などを取材、中継などを通じ、紛争の現状を報道して来た方で御座います。

今、世界を見まわせば、各地で紛争や無差別テロが相次ぎ、イスラム国の威力が止まらず、暴力の連鎖は絶えることがありません。

戦場を見てきた佐藤さんだからこそ、なかなか聞けない生のお話しを、皆様に聞いて頂けると思います。

簡単ではございますが、冒頭のご挨拶とさせて頂きます。

本日は、宜しくお願い致します。

会務報告　太田　豊 幹事

①帯広北RC、2月19日(金)の例会は2月18日繰上げ例会と致します。
帯広RC、2月24日(水)の例会は2月18日繰上げ例会と致します。

②帯広西RC、創立記念夜間例会開催のご案内
日　時　2月25日(木)午後6時30分
場　所　北海道ホテル

③帯広RC、創立記念夜間例会開催のご案内
日　時　3月9日(水)午後6時
場　所　ホテル日航ノースランド帯広

④帯広北RC、帯広東RC、音更RC、合同夜間例会開催のご案内
日　時　3月11日(金)午後6時30分
場　所　ホテル日航ノースランド帯広
※尚、帯広東RC、3月15日（火）の繰上げ例会と致します。

委員会報告(省略)
ニコニコ献金(省略)
出席報告(省略)

会　長　大友　広明　　副会長　若林　剛　　会場監督理事　飯田　正行　　発行：広報委員会
幹　事　太田　豊　　副会長　萱場　誠一　　プログラム委員会理事　松見　喜明　　委員長　工藤　正宏　(副)伊東　肇

例会日／木曜日　12時30分～13時30分　例会場／北海道ホテル　帯広市西7条南19丁目1（TEL 21-0001）
創立／1972年2月24日　事務局／帯広経済センタービル4階　TEL 25-7347（直通）　FAX 28-6033

◘プログラム
◇ 講師紹介

国際奉仕委員会
帯広西RC　増井信也 国際奉仕理事

『なぜジャーナリストは戦場に向かうのか』～山本美香の生き方～

ジャパンプレス代表　**佐藤 和孝**　様

こんにちは、佐藤和孝です。

僕は出身が帯広で、親父の仕事の関係で4歳までは帯広におりまして、その後東京に移ったんですけども、生まれたのがこの2月25日なんですね。で、今年干支が一周しまして還暦を迎えることになりました。ということで、増井国際奉仕担当理事の方からぜひ講演をやって欲しいとメールをいただきまして、出身も帯広と言うことで何かご縁があるのかなと思ってお引き受けしました。

また先ほどご紹介いただいた山本美香も彼女のお父様が仕事の関係で帯広におられたときに山本美香が生まれまして、我々二人は同郷であるということを二人で喜んだ記憶があります。最後に訪れたのは、2003年のイラク戦争が終わったあとに美香が日本テレビの夜のニュースのキャスターに就任するということで、そのお祝いもかねて二人の故郷を見に来た時で、今から13年前のことです。

干支が一周して故郷に帰ってきて、帯広の名士の皆さんの前でお話ができることを光栄に思います。

まず最初に、山本美香と僕がどのような仕事をしていたか、17年間くらいの、彼女がこの仕事を始めたときから最後に至るまでを10分くらいにまとめたVTRがあるのでそれをご覧ください。（VTR紹介）

今、見ていただいたVTRは2012年に日本テレビの報道局が総力を挙げて彼女の追悼会のために作ったものです。これは一切報道されていません。

我々がなぜ戦争という現場に向かうのか？僕は美香が死んだ後に自分たちの仕事にどういう意味があるんだろうか、なぜ彼女は死ななきゃならなかったのかをものすごく考えました。2012年、シリアでは世界中のジャーナリスト達が現場に向かったわけです。そこで、多くの欧米の記者達も怪我をしたり命を落としたりしました。その中に美香も入ってるんですけども、第二次大戦以降、一番ジャーナリストが戦場で命を落とした年が2012年でした。そこで、僕は世界中のジャーナリストが現場に向かうこと、どういう想いで現場に行ってるのか、逆に僕自身が彼らの話を聞いてきました。

たとえば、去年、後藤さん（故後藤健二氏。2015年1月30日 ISによって殺害された）がお亡くなりになられて、いろいろ入ってくるところによると「なぜそんな危険なところに行くんだ」「どういう意味があるんだ」「ましてや人質になって身代金を要求され、それは政府に迷惑をかけているんじゃないか」…そういう論調を多く耳にしました。

我々ジャーナリストっていうのは、自分たちが何のためにこういう仕事をしているのか、どういう想いかっていうのは基本的に一切を自分の胸に中にしまっています。あまり言葉に出して言うとむずがゆくなるもんですから。そこで世界のジャーナリストがどういうことを考えて現場に向かっているのかということを、ここで皆様にお伝えしたいと思います。

これはカロリーヌ・ポワロン、パリ・マッチの記者です。彼女も我々と同じように、ご主人と一緒に手を組んで世界中の戦場の取材をしていて、2012年にシリアの中部で砲撃を受けてご主人を亡くすわけですね。彼女は現場に近くに来ていて、彼女はどういう気持ちで夫の死を感じたのかと言うことを聞いてみました。この夫というのはフランステレビの記者をやっている方で、ジル・ジャキエという非常に有名な記者です。

「まずジルの遺体を車に乗せ、首都のダマスカスに向かいました。私は恐怖を感じていました。嘆き、悲しんでいました。道すがらすべて映像として撮影しました。これを忘れたくなかったのです。それを信じたくなかったのです。嘆き、悲しんでいました。泣きました。たくさん話をしたかった。話すのをやめませんでした。彼が死んだということができない。私は彼が死んだと言えなかった。すごく苦しく辛い時間でした。彼の顔が生気を失っていました。複雑だったのです。まるで心臓を持っていかれ、心臓をえぐり取られるように感じました。息が詰まり、話すことができず、泣き、叫び、話し、何もなかったかのように撮影を続け、すべてが同時に行われ、私は嘆き、悲しんでいました。」ということを彼女は私に語ってくれました。僕も2012年に　同じようにパートナーを現場で亡くしたもんですから、　彼女の気持ちの一端を少しは理解することができましたけれども、言葉に言い尽くせな

い辛い苦しい想いではなかったのかとインタビューの中で感じました。

彼女もパリ・マッチの記者ですから「また現場に向かいますか？」と聞いてみましたら、こう答えました。

「それは、今、私が自問自答していることです。でも、ええ、続けると思います。これからも続けていくと思います。ただ、シリアには足を踏み入れたくありません。行きたくありません。私は仕事を続けますが、別の場所に行くでしょう。別な事件、別な国、別な法規、別な人間的物語。私は率直に過酷な現場で仕事を続けていくでしょう。」

まあ、辞めないんですね。こういうことがあってもね。同じところに足を踏み入れたくないという気持ちも僕は僕なりに理解しましたけれども。

そこで亡くなったジル・ジャキエと同じ現場にいた同僚のカメラマン、彼もそのとき砲撃を受けて負傷するわけですけれども、まだリハビリ中の彼にお目にかかってジャーナリストという仕事について「我々ジャーナリストは命をかけて、命をなくしてまでも伝えなくてはいけないものがあるんでしょうか？」と聞いてみました。

僕は美香を亡くしているもんですから、世界中のジャーナリストはどう思っているのか。彼はこういいました。

「それは難しい質問です。しかし私はこの仕事で、起きたことを伝えていかなければならないと思っています。そうしなければ、言論の自由が消滅してしまいます。独裁者がシリアで今起きているように横行し、市民を虐殺するでしょう。ですから、私たちは伝えなくてはならないのです。この仕事は絶対に必要です。圧政者に対する反対勢力ですから。この仕事がなくなれば圧制者が横行するでしょう。そして民主主義が消滅するでしょう。真実に光を当て、残虐で独裁的な指導者達がしていることを知らしめるために、彼らがしていることは間違いだ。なぜなら市民を虐殺しているからです。ですから、それを伝えるために私たちはいるのです。もし私たちにそれを伝えないようにするのなら、それは悪事への道を開くことになるでしょう。」

これはなかなか自分の口からは言えませんよね。先ほど行ったように正面切って自分の想いを、この仕事の意味を喋れって言われてもなかなかこういう答えは僕自身はできません。この会のテーマも戦争予防でしが、彼に「戦争を我々ジャーナリストは止めることをできるのでしょうか」ということも聞いてみました。

「率直に言って深く確信しています。時には時間がかかりますが、たとえばアウン・サン・スーチーがビルマに存在しているのは偶然ではなく、半分はジャーナリストが、半分は各国からの圧力があったからです。結果として軍事政権側は彼女に圧力を加えることをやめ、彼女はいまや民主的に存在しています。我々には果たすべき役割があるのです。」と彼は言い切ります。アウン・サン・スーチーさんは今や選挙で大統領になろうかという段階ですね。

彼に「また現場に戻りますか」とうかがうと

「私は再びシリアに行きます。なぜなら私にとって私の事件は終わっていないからです。」

と答えてくれました。

その後にパリからロンドンに行きました。この写真に写っている隻眼の金髪の記者メリー・コルビン。アメリカ人でイギリス「サンデータイムズ」の記者です。彼女も2012年シリアで砲撃を受けて即死します。享年48歳。欧米では隻眼の女性記者として有名な方ですね。ロンドンでは彼女と一緒にコンビを組んで写真を撮っていたポール・コンロイに取材しました。彼も「サンデータイムズ」のカメラマンでマリー・コルビンと何年間かコンビを組んで紛争地を取材してきた男です。マリーが砲撃を受けたとき、彼は隣の部屋にいて大けがを負い、イギリスに帰るわけです。彼もフランステレビのカメラマンと同じように杖をつきながらリハビリをしている中で僕のインタビューに答えてくれました。まずマリー・コルビンが女性記者として何を伝えたかったのかポールに聞いてみました。

「マリーは無実の子供・女性。一般市民が殺されていることを見過ごせなかったのです。マリーは全世界にこの惨劇を知らしめようとしたのです。発信すること、真実を伝えることがジャーナリストの使命だからです。彼女は常々事件の目撃者になりたいと行っていました。彼女の報道の目的は殺戮を辞めさせること。報道で事実に光を当てることにより圧力をかけ、当事者双方を冷静にさせ、紛争・殺戮を辞めさせようとしたのだと思います。」

現場でたまにはマリーというこういう自分たちの仕事の想いについて話をしていたんでしょうね。じゃあポール自身はどのように考えているのか聞いてみました。

「ジャーナリストとしてやらなければならないと思っています。メディアの存在は不可欠です。われわれは世界の暗闇に光を当てなくてはなりません。戦争をとめることはできなくても、最悪の事態になることは報道することで防ぐことができるのです。」

この仕事は命をかけてまでやる意味のある仕事か質問してみました。

「はい。マリーとよく命を懸けるほどの取材はないかもしれないという話をしていました。しかし、ジャーナリストの死によって取材が行われなくなるようなことがあってはならないと思います。ジャーナリストはとても重要な仕事です。マリーの死や私の怪我はとても悲しく辛いことですが　我々はひるむことなく取材を行うべきなのです。人々は今でも犯罪・戦争を目撃してくれる人を求め得手います。」

我々はジャーナリストという仕事は目撃者になって、ただの目撃者ではなく、それを伝えるというのが我々のひとつの仕事だと思っています。

イギリスに行ったときに、今写っているのは正式にはセント・ブライス教会というんですが、通称ジャーナリスト教会と言われている教会です。500年以上の歴史のある教会で、その当時はいろんな通信社とか新聞社がこの路地に集まっていて、そこの近くにある教会だからジャーナリスト教会というふうに呼ばれるようになったそうです。なかなか立派な教会でしたが、この教会には戦争などを取材中命を落としたジャーナ

リストの遺影が祀られています。教会では国籍宗教を問わず殉職者達に祈りが捧げられています。その中に山本美香の写真もありまして、「アレッポで殺された山本美香のご冥福を祈る」と書かれていました。美香だけではなくてVTRの中にもあった2003年に隣の部屋で亡くなったロイターの記者も、美香の祀られている横の壁にその名前が刻まれていました。そのとき思ったのは「仲間に囲まれているのからいいのかな。いや、本当はこんなことになって欲しくなかった…」そういった複雑な想いでこの教会を去った覚えがあります。

美香のために何ができるのか。アレッポに戻って銃弾を打ち込んだ部隊なり兵士なりを探して殺してやろうかと思いました。でもそれをやって「じゃあ美香ちゃん喜ぶのかな？」と思ったときに、殺人者の名前ってのは歴史には刻まれるはずがないと考えました。そして僕は、美香の名前をジャーナリズムの世界の中で永遠に刻んで残してあげたいと思って財団を立ち上げました。また、この財団において後進のジャーナリストを育て、その後進のジャーナリストたちのひとつの道標や灯台の役割を果たしてくれればいいなという想いで山本美香国際ジャーナリスト賞を作りまして、毎年5月26日授賞式を行っています。5月26日は彼女の誕生日なんですね。

今年5月に3回目を数えるんですが、去年2回目の受賞者はスペインのフォトジャーナリスト リカルド・ガルシアさんでした。彼は何度かシリアに行ってISに拘束されました。6ヶ月間拘束されて、おそらくスペイン政府が身代金を払って解放されるわけですけれども、その後またシリアの現場に戻って取材を続けた男です。彼の素晴らしい勇気と写真、そしてジャーナリスト魂に対して賞を差し上げたのですが、彼は日本に来て開いた記者会見で「反啓蒙主義に陥ってはいけない」という言葉を非常に強調して言いました。反啓蒙主義、蒙昧主義とも言いますが、これは市民に情報を知らない方が良い、あるいは市民に情報を知らせたくない権力者にとっては非常に都合のいいことなんじゃないでしょうか。権力者が意のままにさせないためには情報を知ると言うことが一番大事なことなんだ。そのために自分たちが情報を伝えているんだ。ジャーナリストは社会を暗闇にしないために不可欠な存在なんだ。そういう言葉を残して彼は帰っていきました。

いくつか外国人記者の報道に対する想い、現場に行く想い、今日は時間の都合でそれほどご紹介できませんでしたが、山本美香が何を考えて現場に行っていたのかというを、彼女は何冊か本を残してますし、いくつかの大学で講義もしていましたので、その中で彼女が残した言葉をいくつか皆さんにご紹介させていただきたいと思います。

「世界の安全は日本の安全につながります。人道的な見地からも目をそらしてはいけない大切なことがたくさん亜あるはずです。それをしかたがないこと、直接関係がないことと排除してしまうのでは、ジャーナリストとしての役割を果たしているとは言えません。」

これは早稲田大学の大学院のジャーナリズムコースでっ将来記者を目指す若者たちに向けた言葉です。

「私たちジャーナリストが何人殺されようと、残った誰かが記録して、必ず世界に伝える。すべてのジャーナリストの口をふさぐことはできない。どんな強大な力を持った存在であっても、きっと誰かが立ち向かっていくだろう。」

彼女と一緒に暮らして現場に行って、日本では生活を共にしてたんですけども、あんまりこんな話ししたことないんです。ああ、こんなことを考えていたんだ、こんな想いで現場に行っていたんだ。亡くなった後に初めて感じた体たらくな僕なんですけども、コミュニケーションがなかったとかいうことではなく、自分たちの志とかあまりお互いの中でも身近な中でも語り合うようなことではなかったんです。まして僕はけっこう怠惰な方ですから、彼女が本を出してもざっと目を通すだけで、あんまり熟読したことがなくて、ああ、こんな凄いことを書いていたんだというふうに思いました。

もうひとつご紹介します。

「平和な世界はたゆまぬ努力を続けなければ、あっという間に失われてしまいます。私たち大人は平和な世界を維持し、できるだけ広げるように道を作ります。そして、これから先、平和な国づくりを実行していくのは今、十代の皆さんです。世界は戦争ばかりと悲観している時間はありません。この瞬間にもまたひとつ、またふたつ大切な命が奪われているかもしれない。目をつぶってそんなことを想像してみてください。さあ、みんなの出番です。」

これは十代の子供に向けた彼女の書いた児童書の最後の言葉です。

我々と名が道を広げると行っていますとおり、素晴らしい道を造れるような大人でありたいと思うんですが、僕自身あんまり人生残り時間がないもんですから、こういったことを若い人達に伝えながら後進を育てていくことができればいいな思っております。

今、山本美香が残した言葉と欧米の記者が言ったことは言葉や言い回しは違うけれども、その思いはほとんど何にも変わらないですね。そういった想いで我々は現場に出ています。

なんでそんな危険なところに行くんだ、何の意味があるんだと問われますが、それは今世界で起こっていることそれを伝えるのが我々の仕事だからです。

この仕事がなくなれば多くの人は何も知ることができなくなるだろうという自負を持ちながら現場に立っていますけれども、ジャーナリズム・ジャーナリストがどういった仕事かということをもっと多くの日本の方にご理解していただきたいという想いで今日はお話をさせていただきました。今回のテーマである戦争予防が我々の仕事の中にも含まれていると考えます。僕ももう還暦ですけれども、まだ現場に行くという想いはまだ残っていますので、これからも美香の想いを背負いながら続けて参りたいと思っております。今日はご静聴ありがとうございました。